この道はいつか来た道

登場人物

男

女

風

ダチでも何でもないから、ただいるだけなんでしょう……？

女　そうです……。あなた、まだこのことを気にしてたんですか……？

男　いやいや、たとえばの話じゃないですか……。

女　私、こんなものがオトモダチだなんて、思ったこともありません……。何なら私、今ここで、蹴っとばしてもいいですよ……。

男　まあまあ、やめて下さい……。私も、気にしてるわけじゃありませんから……。

女　あなたの方で蹴っとばして下さってもかまいません……。私、何度かよして下さいって言いましたけど、それは、私とこれがオトモダチとかそういうことじゃなく……。

男　わかってます……。私だって別に、そういうことを怪しんでいたわけじゃありませんよ……。ただ……、ね、私が言いたいのは、そこ（と、ポリバケツを指しつつ）とここ（と、女を指し）には何もないけど、ここ（と、女を指し）と、ここ（と、自分を指し）には、オトモダチというあれが……。

女　そうです……。

男　結婚を申しこんでもいいですか……？

女　ちょっと待って下さい、もうですか……？　今、オトモダチになったばかりじゃありませんか……。

男　そうですね……それじゃ、ちょっと待ちましょう……。あの雲が、あのあたりまで流れてからなら、どうです……？

昼

女　そうじゃありませんよ、あなた……。こういうことは、時間がたてばいいって問題じゃありません……。その前にいろいろと……。

男　プレゼントをするとか……？

女　そうですね……。

男　用意してあるんです……。（荷物を探る）

女　でも、何ですよ、オトモダチ同士が、より親しくなるためにはプレゼントも必要ですが……。

男　（出して）これです……。

女　（受け取って）何ですか、これ……？

男　クツシタですよ……。もちろん、片一方しかありませんけどね、ですから、寒い方の足にはくんです……。で、その足があたたまったら、はきかえる……。クツシタってのは足袋と違って、どちらの足にもはけますからね、その点、便利ですよ……。

女　これ、私に下さるんですか……？

男　プレゼントです……。

女　ありがとうございます……。

男　いえいえ、たいしたもんじゃありませんから、どうぞお気になさらないで……。お返しなんて、そういうことは……。

女　お返し……？

男　いえ、ですからね、もしあなたがそういうことをお考えでしたら、お気遣いなさいませんよう

にと……。

女　でも、そうですよ、どんなに親しいオトモダチ同士でも、やはりプレゼントをいただいた以上、お返しをしませんと……。（荷物をかきまわす）

男　そうですか……。それじゃ、ほんのおしるし程度にして下さい……。そうじゃないと、かえって、何ですし……。

女　（荷物をかきまわしながら）あなた、お酒は召し上ります……？

男　ええ、まあ、ほんのちょっとですが……。ですから、あればいただくけれども、なければいただかないという……。

女　だったら、いいものがありますよ……、（と、出して）これです……。

男　（受け取って）何ですか、これ……？

女　お酒を飲んだ後に、それを水に溶かして服むと、酔いをさましてくれるんですって……。

男　あ、さますんですか……？

女　汚くありませんよ、私、ちゃんとふいときましたから……。

男　ふいといたって……これ、落ちてたんですか……？

女　ええ……でも、きれいにふいてから、お薬屋さんに持っていって、これ、何の薬ですかって聞いてみたんです……。ですから、大丈夫ですよ……。変なものじゃありません……。本当は、二錠服まなければいけないらしいですが、あなた、今うかがったらそんなに量はお飲みにならないそうですからね、一錠でさめます……。

男　ありがとうございます……。

女　とんでもない……、どうせ私が持っててもしょうがないもんですから……。私、お酒は飲みませんし〈笑〉……。今、お服みになります……？

男　え……？　いや……だって、これ、酔った時、服むもんじゃありませんか……？

女　そうですけどね……あらかじめ服んでおきましたら、予防になるかもしれないと思いまして……。

男　予防ね……私、あまり予防はしないことにしているんです、お酒をいただく時は……。しまっておきますよ……。

女　そうしておいて下さい……。いつかきっと、お役に立ちますよ……。それから……、そういうもんですからね、お返しなんて考えませんように……。

男　お返しって、これのお返しですか……？

女　ですから、そういうことはなさいませんようにって……。

男　でも、あなたがそうおっしゃるからには、本当はここで、これに対するお返しがあってしかるべきだけれども、今回の場合はやめておこうという……？

女　そうじゃありません……。お返しはいらないんです……。

男　ええ、そのことはよくわかりましたが……。

女　わかったら、いいじゃありませんか……。

男　いいんですけど……、私がうかがいたいのは、いいですか、あなたの気持ではなくて、こうい

う場合の原則なんです……。

女　原則……？

男　そうです、原則です……。私はプレゼントしました……。そして、お返しはいりませんと言いました……。これは、私の気持です……。しかし、原則はお返しをすることになっていましたので、あなたはその原則にのっとって、お返しをしました……。そして、お返しはいいって言いました……。わかりますね、これはあなたの気持ですよ……。でも原則はどうなんです……？　原則はお返しをすることになっていたとしたら、私はあなたの気持につけこんで、横着をしたことになる……。

女　あなたも、ずい分こみいった考え方をする方なんじゃありません……？　この世界について……。

男　そうやって生きてきたんです、私は……、この油断のならない世界を……。

女　お茶にしません……？

男　いいですね、私のマホービンのお湯が、まだあたたかいはずです……。

女　それでは、私、お茶の葉を出します……。

男　お茶碗は、私、持っていますよ、それほど汚れてないのを、二つ……。

女　この、お盆の上に乗せて下さい……。私、ウェット・ティッシュを持っておりますから、それでふきます……。

男　汚くはないんですよ……。

女　ふくと……いやですか……？

男　いやいや、ただウェット・ティッシュがもったいないかなと思いまして……。

女　大丈夫です……、沢山ありますから……。

男　それじゃ、私、茶こしを出しましょう……。これ、ちょっと穴があいておりますが、ここんとこに何かを詰めれば……。

女　私、キュースを持っております……。ふたのないのを……。でも、ふたなんかなくたって、お茶は入りますからね……。

男　待って下さい……。それなら、私、茶こしはやめて、ふたを出します……。

女　ふた、あるんですか……？

男　ふただけ、持ってるんです……。少し大きいかもしれませんが……。

女　それ、やかんのふたじゃありません……？

男　でも、ふたにはなりますよ……。

女　そうね……。（キュースにお茶の葉を入れながら）あなた、何か、お茶受けになるようなもの、お持ちですか……？

男　お茶受けって、何です……？

女　ですからね、お茶をいただきながら、こう……、つまめるもんですよ……。

男　アスピリンとか……？

女　あなた、お茶飲みながら、アスピリン食べるんですか……？

男　そうじゃありませんけど……、ほかに口に入れるものを思いつかなかったもんですから……。

女　私、イカの塩辛なら持ってるんですけど……。

男　イカの塩辛、それにしましょう……。

女　お茶受けとしては、異例じゃありません……？

男　異例じゃありません……。塩っぱいでしょう、お茶がすすみます……。私が、お小皿を出しますから、それほど汚くないのを……。もちろん、ウェット・ティッシュでふいていただいてかまいませんが……。

女　（出して）これです……。ね、このまま捨ててあったんですが、まだだいぶ入ってますでしょう……？　塩辛ですから、腐ってやしませんよ……。

男　少し、乾いてますか……？

女　ええ、でも、しゃぶっていればそれらしくなります……。お箸は、御自分のをお持ちですね……？

男　お箸……？

女　塩辛をつまむ……。

男　ああ……。（出す）

女　それじゃ、いただきましょうか……？

男　いただきます……。

二人のお茶……。

女　ねえ……。

男　何ですか……？

女　何ていい日なんでしょう……。

男　そうですね……。お茶がおいしい……。

女　塩辛もどうぞ……。

男　いただきます……。

女　あなた、歯は大丈夫ですか……？

男　自信はないんですが……、あなた、今おっしゃったように、しゃぶっていれば、そのうちに何とかなるだろうと思いまして……。

女　そうですよ……。後で、どうしようもなくなったら、ここに出して下さい……。それは無作法でも何でもないことですよ、だって私たち、その時にはもう充分に、味わいつくしているんですからね……。（噛みながら立ち上ろうとする男を見て）あなた、どうしました……？

男　どうもしませんけどね……、これ、塩辛ですか……？（立ち上る）

女　塩辛ですよ……。何だと思ったんです……？

男　いや……、するめかと……。

女　するめのはずがないじゃありませんか、ここにちゃんと、塩辛って……。どうして立つんです

……？

男　立たないと、噛み切れないんですよ……。

女　ですから……。あなた、どこへ行くんです……？

男　どこへも行きゃしません……。ただ、噛み切れませんから……。

女　しゃぶるだけにして下さいって、今、言ったばかりでしょう……。

男　しかし……、（やむなく、口から引きずり出して）残念だ……。

女　ここに捨てて下さい……。あなた自身、しゃぶるだけだって、言ってたじゃありませんか……。

男　（坐って）しゃぶっていると、噛みたくなるんです……。そして噛んでいると、飲みこみたくなる……。

女　あなた、噛む時はいつも、ああして立ち上るんですか……？

男　そうじゃありませんけどね……、ただ、坐っていると、力が入らない感じがしません……？一生懸命やろうとすると、思わず立ち上ってしまうもんですよ、人間というものは……。

女　私はそんなことありません……。（しゃぶっていたものを、口から出して捨てる）

男　まだ、ふっくらしているじゃありませんか……。

女　いいんです……。干しといて、またしゃぶりたくなれば、しゃぶればいいんですから……。

男　え……？　それじゃ、これはみんな、あなたがそうやって……？

女　違います……。ここにあるのはみんな、拾ってきたそのままのものです……。私が一度しゃぶったのは、こうして……、（と、ポケットから紙に包んだものを出して見せ）別にとってあります

風4

……。

男　ああ……。あなたが時々、夜中にクチャクチャやってるのは、それですか……？

女　そうです……。夜中に、お腹が空いた時などに……。でも、どうして知ってるんです、そんなことを……？

男　いや、いつかそんなことがあったような気がしただけです……。お茶を、もう一杯いただけますか……？

女　はい。どうぞ……。少し、寒くなりましたか……？

男　ええ、少し……。何か、掛けますか……？

女　そうですね、それじゃ、とりあえず……。（と、ショールをかける）

男　大事にして下さい……、普通の体じゃないんですから……。

女　ありがとうございます……。でも、普通の体じゃないっていうのは、どういうことです……？

男　ですから、私たちはこういう生活をしていますからね……、ちょっと風邪を引いても、たちまちどうしようもなくなるってことです……。

女　何度か私、そういう風に言われたような気がするんです……。あなたは、普通の体じゃないんですからって……。

男　私たち、だいぶオトモダチになったと思いませんか……？

女　そうね、ほとんどオトモダチと言ってもいいくらいですよ、私たちは……。でも……。

男　結婚するほどじゃない……？

この直ラスト

女　ええ……。

男　何故……？

女　オトモダチなら、カガイ仲がよければいいんですが……。でも、結婚となると、愛しあっていなければ……。

男　愛しあっているっていうのは、どういうことです……？

女　あなた、愛しあったことがないんですか……？

男　いや、ありましたよ……。ありましたけれども……、その時はただ、夢中でしたから……。

女　もしここに熊が出てきて、私に噛みついたとします……。その時あなたが、身の危険もかえりみず、私を助け出してくれましたら、私たちは愛しあっていることになります……。

男　なるほど……。でもその熊は、どうしてあなたに噛みつくんです……？

女　それはどういう意味ですか……？

男　だって、ここには私もいるんですよ……。私に噛みつくかもしれないじゃありませんか……？

女　それでも、同じことです……。その場合、私が身の危険もかえりみずあなたを助け出しましたら、私たちは愛しあっていることになります……。

男　あなたが私をね……。しかし、熊が出てきて、あのポリバケツに噛みついたらどうでしょう……？

女　熊は、ポリバケツになんか、噛みつきません……。

男　何故……？

暗転